

電話相談員の学校見て歩記

あるき

子ども
の

エ
コ
ロ
ジ
ー

の

「子ども110番」電話相談員
「人間と性」教育研究協議会幹事
安達倭雅子 著



安達 倭雅子（あだち わかこ）

1937 年大分市に生まれる。明治大学卒業。「子ども 110 番」「熟年 110 番」「HIV と AIDS 相談電話」電話相談員を兼務。“人間と性”教育研究協議会幹事。NHK 学園生涯講座講師。

著書 『電話の中の思春期』（ユック舎）『私と彼とそのあいだ』（筑摩書房）『性の絵本』（共著、大月書店）『子どもたちの性』（集英社）



子どものエコロジー

1993 年 8 月 20 日 — 初版発行

著 者 — 安達倭雅子

発行者 — 沢田明治

発行所 — ㈱民衆社

〒113 東京都文京区本郷 4-5-9-901

振替 東京 4-19920

電話 03・3815・8141

FAX 03・3815・8144

印刷所 — 飛来社

製本所 — みさと製本印刷㈱

© Printed in Japan

ISBN4-8383-0708-X C0037

電話相談員の学校見て歩記^{あるき}

子ども
の
エコロジカル

110番電話相談員
性・教育研究協議会幹事

達倭雅子 著

prologue

愛のくもりのない日で 5

小学校見て歩記^{あるき}

閉鎖的な王国の中で 18

たかが「うち」の話じゃない 31

コミュニケーションの鉄則 44

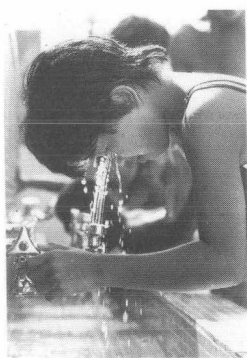
新・いじめ構造 58

「着衣の身体測定」と子どもの権利 70

心の魔術師がいる限り 82



も く じ



中学校見て歩記^{ある き}



バイバイ、ベイベー！ヘイ、ベイベー！ 96

制服着せといて個性教育だなんて言わせない 110

学校で一番モデルのは身長計!? 122

すべての話は高校受験に通ず 134

家族という名の愛と規律 146

根性焼、誰も皆まともに生きたがっている 159

高校見て歩記^{ある き}

不気味なベルトコンベア 174
—花の入学式の内幕—

学び疲れ疲れた高校生 186

愛ってひどいことなのね 196

夏枯れる定時制高校 208



ある き
養護施設見て歩記

「じゃりんこチエ」みたいな子 222

他人同士の創った見事な「家族」 233

epilogue

電話の中で子どもたちの声を
聞きつづけようと 249

あとがき 263

・写真提供

森 正道

埼玉新聞

山崎 宏

・表紙カバー装幀

K I S

※ 本書の写真は、本文とは関係ありません。

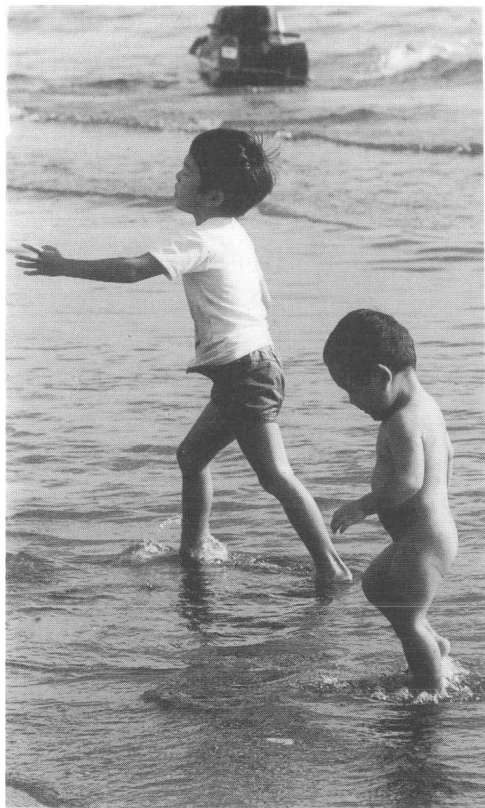


愛の くもりのない目で

prologue

「ガキの街」 原宿にたたずめば

私の仕事の一つである民間の電話相談機関「子ども110番」の相談室は、東京の原宿にある。JR原宿駅からさほど遠くはない。原宿はいつも若者でごった返している。いや、正確に言うなら、原宿は若者というにはまだ年若く幼い少



年少女のたむろする街である。「ガギの街」という呼称さえある。

この街にたたずめば、日本全国の訛なまりが聞けると言われている。修学旅行で東京にやって来た中学生や高校生が自由行動の時間になると、この街に真先に来るからだ。明治神宮のいわゆる表参道には見事な櫛けやきが並木をつくっている。櫛の根方には、歩道に品物を並べただけの出店が安物のリボンや手作りのアクセサリーなどを売っている。小さな机と椅子だけの手相見もいる。なぜか外国人が古着を売っている。とにかく雑多なのだ。そして大方は安手なのだ。

その原宿の街を修学旅行の子どもたちは、ぞろぞろと、ゆつくり歩きながら「東京みやげ」つまり「原宿みやげ」を買うのだ。子どもたちは、何人か必ず一緒に歩いている。安価な、しかし彼等が「ナウイ」「カッコイイ」と思ったおみやげが、ふんわりと入れられた同じような大きな紙袋や原色のビニール袋をどの子も手に提げている。

彼等の紙袋やビニール袋は、たいてい大き目だが、さして重くはないから、風に揺れていて、それは子どもたちの存在の量ゆきを安直にふくらませているように見える。彼等は、もちろん行くべきはつきりとした目的地を持っているわけではない、ただ見物しているのだから、実にゆつくりとふわふわと歩く。それはまるで風の中のお祭りの綿菓子のように頼りない。

通常だと、午後二時過ぎ、私は原宿駅に降り、定められた二時半に職場に着くために、この櫛の並木の下を急ぎ足になる。すると、いきおい、そのぶらぶらふわふわしている綿菓子たちを、いくつも追い越すことになる。彼等の体格は、私の世代よりはるかにのびやかで大きい。自慢じゃないけど、私はチビだ。身長一四五センチ、体重目下は三九キロ、年齢五十四歳、鼠のシッポみたいにちんけな初老のおばさんである私は、

「ちよつとオ！ 私、急いでるんだよ！ あなたたち、もう少し早く歩くとか、はじっこ歩くとか、何とかしてくれないかしらねえ！」

と内心、ぶつぶつ考えながら、綿菓子たちの右を抜け、その左を越して行く。午後五時、電話相談がスタートする前に片づけておかないことや、準備しなきゃならないことが山ほどあるのだ。

「ほら、ちゃんと前見て歩いてよ。ぶつつかるでしょう？」

たまにはどなつてみたい気持ちをおさえながら、私は靴音をあらげる。しかし、ふと気づくと妙な気にもなる。こうして、綿菓子たちの傍をすり抜け走り抜け、職場に飛び込んで、さて、午後五時電話をスタートさせると、電話の向こうから、こんな相談が入ってくるかもしれないのだ。いや、きっと今夜も入ってくるのだ。

「今日、原宿でエ、おみやげにリボン二本買ったんだけど、本当はリボンをおみやげに買

って来て、頼まれてたのは、A子とL子とB代だったんでエ、考えてみたら、一本足りなくて。ねえ、こんな時、どうすればいいの？」

などと、男の子は言うかもしれない。いや、昨夜は確かこんな電話があつたじゃないか。「東京に行った時、原宿でナンパした女の子がいるんだけど……手紙出すのに、何て書けばいいと思う？」

テレホンネームという「砦」

だったら、今夜、電話をかけて来る子は、さっきの綿菓子の子かもしれない。私はその傍を職場へ急ぐ、妙な話だ。

現在、民間の電話相談機関の場合、職場のスペースは広く豊かであるというわけではない。食堂もなければ、正規の休憩室もない。狭いスペースに、電話器だけが正にところ狭しと置かれている。

私が職場に入る二時半は、午前一〇時から午後二時までの育児相談が終わったところで、その相談員が残務整理をしており、その上に、同じフロアで午後五時から九時まで相談業務を行なう「子ども110番」や「熟年110番」の相談員たちが仕事に入る時刻なので、相談室は一日の中で一番人口密度が高く騒々しい。机や椅子の数より人間の数のほうが多い時さ

えあるので、相談員たちは資料を抱えて、どこで仕事をするか陣取り合戦を余儀なくされる。

「ここ貸して？」

「三〇分だけならね」

「あら、ケチ。でも何かあるの？」

「取材が三時からで、三時半からは定例会議よ」

などという会話は始終なのだ。それにこの時間帯は、相談員が大声で話をする時間の一つに当たる。

と言うのは、ここでは相談時間中は、相談がもちろん中心になるのだから、相談以外の会話はきわめて小声であることが習慣づけられている。相談中の相談員との必要な対話は、当然、筆談である。ところが、午前の部が終わる二時から午後の部が始まる五時までや、午後九時、相談業務がすべて終了した直後など、相談室はその呪縛と抑圧をはね返すように声高になる。相談業務特有のストレスを瞬時発散させるためであるかのように、部屋が意識的に華やぐのもこの時である。やたら声高に会話が飛び交うのだ。

「あいう、R子さんのことですけれど、少し気掛りなのです。少しお時間いいですか」

T相談員が、あたりの華やかな雰囲気になぞらない声で話しかけて来た。彼は「子ども

110番」の相談員になって、まだ一年。しかし、ただ長年いるだけでボンヤリの私などよりはるかに勉強家で、いい仕事をしている。子どもたちにとっては、頼りになるお兄さんである。

「R子さんって、中二で過呼吸のある？」

「ええ、そうなんです。このところ様子がよくないので……」

「過呼吸の発作がひどくなってるの？」

「いいえ。言うことがだんだん危険性を帯びてくるように思えるので、何だか放って置けない気がしまして……」

Tがカード、つまり相談記録を机の上に置いた。相談回数も短期間に五〇回を越えている。

「最初の頃、すでに《心の中がいつも人によみとられて困る》と訴えています。分裂症の人がよくそう言いますよね」

「トラさんは、R子を分裂症だと思う？」

私たちは、それぞれテレホンネームを持っている。それは電話相談というものが、相談者には決して現実の中では会わないということを、ほとんど逆手にとった形で、それを信頼や安心のベースが成り立つための「垣根」、相互のための「砦」にしていくのである。T

のテレホンネームはトラ、私のそれはハトである。

「いや、ハトさん。私は心理のほうはやってますが、医者じゃありませんから、病名はつけられません。しかし、R子の場合、幻聴もある様子ですし……」

「トラさん、もう少し詳しく話してよ」

深刻な話をしている初老の女と青年が真顔で「トラさん」「ハトさん」と呼び交わしているのを、もし外部の人が見たら、人々は怪訝に思うか、笑い出すかするだろう。しかし電話の中だけでなく、厳格に日常の中でも呼称を習慣づけておかないと、垣も砦もふっ飛んでしまうことがある。

「おい。この前の相談員出せ。名前は何て言うんだ。ひでえこと言いやがった。殺してやる」

などと少年が電話の向こうからどなることもある。こんなことで相談員はあわてはしない。しかし、つい熱心に相手の誤解にとり組もうとして、うっかりこう言い返したらもうおしまいだ。

「それは何かの間違いだ、村山さんに限って、ひどいこと言うわけじゃないか」

こんなまさかの時にも、たとえば、

「わかった。この前の相談員ベコさんと代わるから、本人ともう一度よく話し合って」

などと言えるように、私たちは日常もテレホンネームを呼び合う。もっともそれが高じて相談員の家へ電話して、電話口の家族に、

「こんにちは。私、オオカミですが、ヒツジさんいらつしやいますか？」

とやった強者^{つわもの}もいるほどだ。

「愛」のくもりのない目で

トラがR子の様子を詳細に話した。R子はいつも誰かにささやきかけられているという。《お菓子を食べちゃだめ》《この道、通っちゃだめ》、声は、アレだめコレだめと指示し続けるという。

「最近じゃ、母親に似たくないと言いき出したり、その声が死ねって言うとか、歯の汚い目つきの悪い獣に追われると言ってみたり、急にあの人に謝らないと殺されるとか物騒なことの言い続けなんです」

「記録の中には《急におかしいこと言うから私、笑っちゃうんだけど、私以外は誰も笑わない》なんてのもあるわね。幻聴だと見なければならぬでしょうね」

私は、カードを読み返しながら言った。

「ええ、それに話がつながっていかないかと思うと、R子特有のつながり方もするんです。

冷たい風に当たると顔がだんだん母親に似るとか、担任の先生がセキをすると学校の帰りに必ず犬に吠えられるとか、一種の関係妄想だと思いますけど」

「うちの相談員はどう対応している？」

「ええ、みんな必死に医療機関に相談することをすすめてますよ。ヒツジさんは内科の先生でもいいから、ありのままを話すように言ってますね。ネコさんは児童相談所を、オオカミさんは保健所に行つて話せと言つたと、それぞれ記録に残っています」

「親に話せとか、親を電話口に呼び出そうとした相談記録はない？」

「ありますよ。ほとんど全員がやっています。ハトさん自身も《アタックしたが失敗》って記録してるじゃありませんか」

R子のような場合、異常を相談員が親に伝える。親がびっくりして病院へ、病気が初期でくい止められる——そんな結末は容易に望めない。私たちにしても、せっかく呼び出せて、

「どうして家の子が病院へ行かなきゃいけないんですか。『子ども110番』って何なんですか。警察に訴えますよ」

と親御さんに叱られたこともある。

「ハトさん。僕にはまだ子どもがいませんが、お母さんのハトさんに一度おたずねしたい

と思つていたのですが、R子のような場合、どうして親はそれに気付かないのですか。いつも傍にいるから、一番見えるはずですよね」

トラの聞いているのは、子が見えない親の心情なのだ。

「トラさん、私たちが雑踏で誰かと待ち合わせた時、あのすごい人の中で、どうしてその人に会えたと思う？」

「あ」

「会えた瞬間は、あの大勢の中でその人しか見えてない。つまり、見たいものを見るわけよ。見せしめたものは、会いたいという『愛』よね。これを裏返せば、『愛』は見たくないものを一切見ない力を持つてゐるの。自分の子どもが心を病んでるなんて、親なら、親だからこそ認めたくない。だから決して気づかない」

「ハア」

トラは、まだ少し疑わしいという声を出した。さて、私は工夫してしゃべる必要がある。

「トラさんは、好きだった人に突然、裏切られたことないかなあ」

「残念ながら、あります」

「私にも、昔々あるわ。そんな時、実は突然じゃなくて、かなり前から予兆があつたと思わない？」

「後になってそれは思い当たるんですが、後の祭りってやつです」

「私の場合なんか、まぬけた話なのよ。彼がそうなるたつた三日前に、体中痛いつて電話があつて、私は四時間連続でマッサージしたのね。その間中、ずっと話をしてて、それで私、何にも感じ取れなかった。女の人からその翌朝早々に《まるごといただいたわよ、よろしく》って元気印の電話もらつて、青天の霹靂、青菜に塩よ。なぜ私に、その予兆が受け取れなかったんだと思う？ 彼だつて極悪人じゃない。私に対して人間らしいサインを、無意識にも出していたはずなのよ。《僕たちはもうすぐだめになりますよ》って。それを私が何もキャッチ出来なかったのは、私の彼に対するこうあつて欲しいとか、こうあつては困るとかの願いみたいなもの。所詮、それは信頼のおしつけなんだけど、通俗的に言えば、『愛』の盲目現象だと思うの。それは私の思いの深さだつたんだつて今もそう思つてゐるわ。親心も同じように、『愛』だから見えない」

「ああ、それならわかります。でも、こんな話、僕にしていいいんですか？ 僕、方々でしゃべりますよ」

「しゃべつてもいいわけよ。でも、これはトラさんに親を理解してもらうためのフィクションですからね。悪しからず」

「ずるい！ 珍しくハトさんが愛だなんて言い出すから、どうも変だと思つたよ」